

## シャンカラ派伝統におけるバクティ讃詩とその意義

インドのシャンカラ派の宗教伝統は、不二元論ヴェーダーンタ哲学を説いたシャンカラ(約700~750)を開祖としている。インド最大の哲学者と言われるシャンカラの著作には、伝統的に彼に帰せられてきた聖典注解書や教義綱要書がある。シャンカラ派では、ウパニシャッド聖典の解釈学として展開したヴェーダーンタ哲学の文献書が、師から弟子へと伝承されてきた。伝統的にシャンカラ作として伝承されてきた著作の中には、哲学文献のほかにも数多くの「バクティ讃詩」(bhakti-stotra)もある。それらの讃詩は、神への敬虔なバクティ(信愛)が救いに与るために不可欠であることを説いている。バクティ讃詩はシャンカラ派の民間伝承や伝統的慣習とともに、世代を超えて「語られる聖典」として庶民層の人びとの信仰を支えてきた。今回は、シャンカラ派の宗教伝統におけるバクティ讃詩の宗教的意義について考察してみたい。

## インドの伝統的哲学者たちの「バクティ讃詩」理解

シャンカラには、300以上の著作が伝統的に帰せられている。インドの伝統的哲学者たちは、それらの著作のほとんどがシャンカラの真作であると確信している。シャンカラの著作には、『ブラフマ・スートラ注解』や諸『ウパニシャッド注解』さらに『バガヴァッド・ギーター注解』などの聖典注解書がある。それらの哲学書は欧米の文献学的なインド哲学研究によれば、シャンカラの真作として認められている。ところが、伝統的にシャンカラに帰せられるバクティ讃詩は、文献学的には偽作であると判断され、これまでシャンカラの思想に関する研究対象から除外されてきた。

しかし一方で、インドの伝統的哲学者たちは、欧米における文献学的なインド哲学研究とは全く異なる見解をもっている。インドを代表する哲学者のマハーデーヴァン教授(T.M.P. Mahadevan 1911~1984)は、国際的にも有名なシャンカラ思想研究の第一人者であった。シャンカラ派信仰の家庭に育った彼は、米国・コーネル大学のインド哲学講座にも招かれ、またInstitut International de Philosophieの会員として西洋哲学にも精通していた。同教授は『ガウダパーダー初期不二元論の研究一』(Gaudapāda: a study of early Advaita, 1975)など、シャンカラの哲学に関する著作を数多く残している。著書の中には『シャンカラの讃詩』(The Hymns of Śaṅkara, 1980)もある。この著書は、シャンカラに伝統的に帰せられる代表的なバクティ讃詩とその注解を収録している。<sup>(1)</sup>

これらのバクティ讃詩は、文献学的なインド哲学研究によれば、シャンカラの真作ではないと判断されている。ところが、マハーデーヴァン教授はバクティ讃詩がシャンカラの真作であるとの前提に立って、その内容を注解している。同教授は約220ものバクティ讃詩の中には、シャンカラの真作でないものも含まれる可能性を示唆している。しかし、たとえそれらがシャンカラの著作でないとしても、シャンカラの思想を反映したものだ<sup>(2)</sup>と確信している。筆者は1982年12月、インド哲学者の中村元教授のご紹介で、マハーデーヴァン教授をマドラスのご自宅に訪問したことがある。その折、同教授は欧米やわが国におけるシャンカラの思想に関する文献学的研究を厳しく批判された。伝統的にシャンカラに帰せられるバクティ讃詩は、シャンカラが庶民層の人びとが教えの内容を理解しやすいようにとの配慮から著したものであることを強調された。したがって、バクティ讃詩の語は、知識層の

人びとを対象とするシャンカラの哲学文献中に使用されている語彙とは異なるが、それは在家信者を対象とすることから当然のことだと言われた。<sup>(2)</sup> シャンカラ派の宗教伝統において、シャンカラの思想を理解するためには、シャンカラの「真作」ばかりでなく「偽作」と言われる著書も、シャンカラ派の具体的信仰のコンテクストに位置づけて、その内容を捉え直すことが重要であろう。

## 「語られる聖典」としてのバクティ讃詩

文献学的にシャンカラの「偽作」とみなされるバクティ讃詩は、シャンカラ派の在家信者のあいだで、長年にわたってシャンカラの著作として、まさに「語られる聖典」として世代を超えて口頭伝承されてきた。バクティ讃詩が説く意味世界は、出家遊行者(サンニヤーシ)たちが依拠するシャンカラの哲学書の意味世界とは異なり、庶民信仰の具体相を説いている。バクティ讃詩では、信仰におけるバクティの意義が強調されるが、それはシャンカラ派において、教義としてのシャンカラの哲学から逸脱しているとはみなされていない。シャンカラの哲学書とともに、伝統的にシャンカラ作と伝承されてきたバクティ讃詩も、シャンカラが説いた正統な教義として受容されてきた。こうした状況は、シャンカラ派の具体的信仰の諸相を示している。

シャンカラは一般的に「シャンカラ」の名称の後に「アーチャーリヤ(師)」の語を付け加えて、「シャンカラチャーリヤ」(Śaṅkarācārya)とか「アーディ(初代)・シャンカラチャーリヤ」(Ādi-Śaṅkarācārya)と呼ばれてきた。後代のシャンカラ派僧院の長も代々、「シャンカラチャーリヤ」と呼ばれてきた。そのために、シャンカラと後代のシャンカラ派僧院の法主シャンカラチャーリヤはしばしば混同されてきた。したがって、伝統的にシャンカラに帰せられてきた著作の中には、後代のシャンカラチャーリヤたちの著作も含まれている可能性がある。

シャンカラは不二元論ヴェーダーンタ哲学において、完全な属性を具えた最高の人格神(有属性ブラフマン saguṇa-brahman)に対して、無属性ブラフマン(nirguṇa-brahman)の優位性を説く。解脱に到達するためには、ブラフマンの「知識」(jñāna)こそが肝心であることを強調している。一方、シャンカラ派総本山のシュリンゲーリ僧院において、伝統的に尊重されてきたシャンカラの伝説的伝記『シャンカラの世界征服』(Śaṅkaradigvijaya)では、無属性ブラフマンの世界も有属性ブラフマンの世界も「最高の境地」として並置されている。<sup>(3)</sup> シャンカラに伝統的に帰せられるバクティ讃詩は、神の恩寵によって救いに与るためには、神へのバクティ(信愛)も重要であることを強調している。このことはシャンカラ派伝統において、シャンカラの「真作」とみなされる哲学書ばかりでなく「偽作」と判断されるバクティ讃詩も、いかに人びとの信仰を支えてきたのかを具体的に示している。

## [註]

- (1) T.M.P. Mahadevan, *The Hymns of Śaṅkara* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1980).
- (2) 詳しい内容については、拙論「シャンカラの哲学への宗教学的視座」『印度學佛教學研究』第61巻第2号、2013年、258~265頁を参照されたい。マハーデーヴァン教授へのインタビューは、1982年12月10日、チェンナイのご自宅でおこなった。
- (3) 拙著『シャンカラ派の思想と信仰』慶應義塾大学出版会、2016年、67~69頁。